

同志社大学に学んで

奨励	井上 勝也【いのうえ・かつや】
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

イエスはお答えになった。
「人はパンだけで生きるものではない。
神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」
と書いてある。」

(マタイによる福音書 4章4節)

同志社大学で学生時代と教員時代を合わせて50年お世話になりました井上勝也と申します。2004年に退職し、現在75歳です。

東日本大震災

去る3月11日、東日本の太平洋岸でマグニチュード9.0という、我々がこれまでに経験したことのない巨大地震が起こりました。それに誘発されて、場所によっては20メートルを超える大津波が襲い、2万5000人近い死者と行方不明者が出ました。また福島第一原発が地震と津波の影響で大きく損壊し、放射能漏れを制御することが難しく、11万人の住民が強制移住させられて現在に至っています。

私は第二次大戦の空襲を体験し、大阪の焼け野原を知っていますが、今回の災害は戦後最大のものです。日本人は戦争で焼け野原になった都市を不死鳥のように復興し、1970年代の初めには日本を世界第2の経済大国に成長させました。今回の大震災も17年前の阪神・淡路大震災に見られたように、被災した人たちを支援するために全国からボランティアが集まり、復旧・復興を手助けする大きな運動が盛り上がっています。家を流され、家族を失った同胞のために支援の手を差し伸べ、同じ日本人として被災者の悲しみや重荷を少しでも分かち合いたいと思います。

ペスタロッチャー

さて、私は同志社大学で18歳の人間形成・思想形成の時期から学部・大学院の時期を八年間過ごしましたが、同志社の学風（school colour）を無意識に空気のように吸いながら、自分の生き方、考え方を形成して参りました。まず私は学部の卒業論文と大学院の修士論文のテーマにスイスの教育家ペスタロッチャー（J. H. Pestalozzi, 1746-1827）の生き方と教育思想を選びました。我が国の教育界にペスタロッチャーの思想が導入されたのは、早くも明治10年代の中頃で、彼を愛の教育者だとか教育方法の改革者だと言ってもてはやし、私が修士論文で取り上げました昭和30年代前半でも彼は根強い人気がありました。もっともペスタロッチャーへのアプローチの仕方が殆どの場合彼の具体的教育実践に向けられ、なぜ彼が多くの孤児たちを我が家に引き取り、我が子同様に愛し育てたかについて、彼の人間観にかかわる問題を考察するような論文は当時の日本では殆ど見あたりませんでした。

我が同志社大学で、そして大学院で指導を受けた研究方法は、教育者を研究対象とする場合に、まず人間研究をやりなさい、すぐさま教育者の活動に注目する前に、その人の活動を支えている人間観を考察し、信仰問題を問い、宗派が何であるかを調べる必要がある、と言われました。「学ぶとはもの知りになることではなく、それによって自分が変わるからだ」とも言われました。このようなアプローチの仕方は京都大学や立命館大学ではとらないでしょう。私は研究の結果、ペスタロッチャーが多くの孤児たちを我が子同様に献身的に育てたのは、彼のプロテスタント・キリスト教の人間観と深いかわりがあることがわかってきました。

留岡幸助

ところで、去る4月21日に寒梅館のハーディーホールで上映された映画「大地の詩（うた）―留岡幸助物語」の主人公・留岡幸助（1864-1934）を私は助手及び専任講師の時代に研究しました。留岡はペスタロッチャーと同じ系譜に属する教育者です。彼はプロテスタント・キリスト教を信じ、イエスの教えを実践し、70年の生涯をキリスト者として生きました。彼は明治18（1885）年同志社英学校別科神学科に入学し、同21年に卒業しましたが、新島襄の薫陶を受け、同志社の学風に感化されています。

同志社スピリット

留岡は同志社在学中、世の中にある二つの暗黒面、即ち一つは監獄（今の刑務所です）、もう一つは遊郭ですが、彼は監獄の改良に生涯を捧げることを決意しました。福沢諭吉の慶応義塾の学生が理財学、言い換えれば経済学を学び、将来立身出世を目ざしていたと同じ時期に、新島襄の同志社は学生に「地の塩」「世の光」として生きることを求めました。当時、山室軍平（1872-1940）の言う「同志社スピリット」―神を愛し、人を愛し、そのために「凡（すべ）ての者の僕（しもべ）」となって奉仕するキリスト教精神―が同志社を支配していたのです。「環境が人間をつくる」という言い方があります。同志社でこのような空気を吸っているうちに、山室が遊郭の解放を畢生（ひっせい）の事業に選んだのに対して、留岡は監獄の改良を自分のミッションにしますのです。

明治10年代の我が国では「苦役本分論」―悪いことをした者は報いとして苦しい労働をするのが当然である、という考え方が伊藤博文や山県有朋といった明治政府の中枢にありました。明治15年の福島事件、同17年の加波山事件や秩父事件に見られるように、全国的に自由民権運動や明治政府への抵抗運動が激化し、これらの事件にかかわった人たちは国事犯（国家の統治機構を変革する目的で暴動を起こし、内乱罪という重い処罰を受けた犯罪者）として北海道に新たにつくられた樺戸（かばと）集治監（重い犯罪者を収容する刑務所）や空知（そらち）集治監に送られ、過酷な労役を強いられていました。彼らは硫黄鉱山で有毒ガスを吸いながら硫黄の採掘作業をやって失明し、また原生林を切り開いて幹線道路をつくる重労働に従事しました。脱走を防止するために重い鎖で足をつながれ、作業中に野垂れ死した受刑者は足から鎖を外されることなくそのまま道端に埋められていたことが、数十年後道路の拡幅工事で明らかになりました。受刑者に対する人権はまったく保証されていませんでした。

北海道バンド

当時日本は早急に国家を近代化して、ロシアの南下を防ぐために北海道開拓を急いでいたのです。このような時代背景のなかで監獄で人権を奪われた人たちの待遇改善を訴え、監獄の環境を改善することを目ざす人たちが、とりわけ同志社英学校の卒業生から出てきました。「北海道バンド」と呼ばれる人たちです。新島襄の平民主義、博愛主義の影響を受けた人たちで、その一人が留岡幸助です。彼は明治21年に卒業して一時丹波第一教会の牧師をしていましたが、24年に空知集治監の教誨（きょうかい）師（受刑者を教え諭す宗教家）になり、重罪犯を調べているうちに、彼らが少年期に犯罪に走り、罪を重ねていることがわかりました。彼は、犯罪を減らすためには、彼らが最初に罪を犯した時点で徹底的に立ち直りをはかるべきであると考え、当時少年犯罪について一番研究が進んでいたアメリカに留学することを決意しました。家財道具を売り払い、妻子を親元に預けて、明治27年最も安い四等船客となって目的地アメリカに向かいました。まず彼はマサチューセッツ州のコンコード感化監獄（reformatory）に行き、次にニューヨーク州のエルミイラ感化監獄に行き、収容されている少年たちと共に作業をしながら、非行少年の感化教育理論とその方法を学びました。当時の日本では不良少年と呼ばれた彼らは、社会から見捨てられ、差別されていましたが、アメリカの感化監獄では彼らがMr. をつけて呼ばれていることに驚いています。一人の人格として認められているということです。

エルミイラ感化監獄

私は昭和52（1977）年、留岡幸助を研究するためにエルミイラ感化監獄に行き、監獄の内部を調査することができました。私が驚いたのは、エルミイラの町にある短期大学の教員が感化監獄の中で出前講義をやり、成績の優秀な青年は週に何回か直接大学に向向いて授業を受けることが許されていることでした。犯罪者は、表面は汚れていても、悔い改めるならば神様は汚れをぬぐいとして赦してくださる、立ち直りを助けてくださるといった考え方が基本にあり、罰するのではなく教育するという考え方があるからです。

留岡はアメリカから帰国後、明治32年、東京の巢鴨に非行少年のための学校をつくりました。家庭の愛情に飢えた少年たちに、愛情に満ちた家庭の要素をもった学校（home school）をつくりましたが、巢鴨が世俗化し、教育環境としてふさわしくないと判断して、大正3（1914）年、真冬には零下20度以下になる北海道遠軽に1000町歩の原生林の払い下げを受け、家庭学校の分校をつくりました。彼は満50歳にして（現在なら70歳以上といったところでしょうが）自ら老体に鞭打って鋸（のこぎり）や鍬（くわ）をもって開拓に従事しています。私はこの遠軽の家庭学校を何回も訪れました。留岡は少年たちを収容する建物と同時並行で立派な教会を建てています。先ほどの映画にこの教会が出てきました。一六二〇年メイフラワ―号でプリマスにやってきたピューリタンたちが自分たちの粗末な住居と共に教会をつくり、16年後の1636年にはハーヴァード大学をつくったのと同じ発想です。

一路白頭二到ル

留岡はエルミイラ感化監獄の典獄（刑務所長）であったブロックウェー（Z. R. Brockway, 1827-1920）の思想的影響を受け、彼の座右の銘であった“This one thing I do.”を「一路白頭二到ル」と訳して、自らの座右の銘にしました。ブロックウェーは不定期刑論や死刑廃止論を主張した人です。受刑者に改心と絶えざる努力が顕著に見られるならば、刑務所長の判断で刑期を短縮することができるという考え方です。

私は自分の信する唯一筋の道をひたすら突き進む留岡幸助のこのような生き方に魅せられ、仲間と共に留岡幸助の研究会を開き、彼の生き方や思想・実践をより多くの人たちに知って貰いたく、研究会メンバーと共に『留岡幸助著作集』全五巻を編集し、刊行しました。我々編集者は昭和56（1981）年「毎日出版文化賞」を受賞し、喜びを分かち合いました。

社会事業は神の委託事業

留岡は同志社英学校在学中、新島校長から「人への奉仕こそ神への奉仕であり、社会事業は神の委託事業である」という考え方を学びました。新島はしばしば「世の中のため」という表現を用い、弱者の味方となって彼らに手を差し伸べることを求めました。彼はニューイングランドで八年間生活し、その間に学んだフィリップス・アカデミーは“Non Sibi.”（Not for myself.）「自分自身のためでなく」を、そしてアーモスト・カレッジは“Terras Irradiant.”（Lighten the World.）「世界を照らせ」を教育のモットーとする学校や大学で学びました。このような教育を受けた新島は同志社英学校では、神様の前ではすべての人間が平等であることを強調し、生徒たちにこの世の汚れを清め、腐敗を防ぐ「地の塩」や、人のためになる灯台やローソクの火のように闇夜に輝き暗さを照らす「世の光」となって生きる人間になるように求めました。留岡は新島の思想を忠実に受け継ぎ実践した典型的な卒業生であると言えます。

W・S・クラーク

私は、昭和40年代後半全国的に広がった大学紛争を契機に、同志社の創立者新島襄の生き方や彼の教育思想、同志社の建学の理念を本格的に研究し、平成2（1990）年『新島襄 人と思想』と題する単著を刊行しました。また私は、明治9（1876）年札幌農学校にやってきたクラーク（W. S. Clark, 1826-86）の研究もしました。新島はアーモスト・カレッジに入学した1867年の秋にこのクラークから化学（chemistry）を学んでいます。クラークはアーモスト・カレッジを卒業後ドイツに留学して博士号をとり、当時マサチューセッツ農科大学の学長をしていました。彼は明治9年8月札幌農学校を開校するにあたり、それまでにあったすべての校則を廃棄して“Be Gentleman!”これが唯一の校則だと言って学生に全幅の信頼を置きました。

明治10年1月、クラークは札幌郊外の手稲山に学生を連れて苔の採集に出かけました。一番背の高い黒岩四方之進に、自分の背中に乗って樹木の先に付着している珍しい苔を取ってくれるように言いました。「三尺下がつて師の影を踏まず」の倫理を体得している黒岩は、クラーク先生の背中に土足で上がることを躊躇しましたが、到頭、クラークの強い要求に従いました。後日この苔は新種であることがわかりました。学生と共に真理を探究しようとするクラークの学問に対する姿勢が伺えます。彼は帰国に先だって明治10年3月、学生に「イエスを信ずる者の誓約」に署名を求めています。

クラークは明治10年4月に札幌郊外の島松で、一期生に対し、“Boys, be ambitious!”と言って別れてからなんと京都に、そしてこの今出川キャンパスに来て、当時同志社英学校の経営と教学に大変苦勞していた新島校長を励まし、なにがしかの寄付してくれました。クラークが、たった8カ月の滞在で、一期生はもとより二期生の新渡戸稲造や内村鑑三に強烈な人格的・学問的影響を与えた理由を推察することができます。ちなみに、このクラーク・チャペルの名前の由来となったクラークは別人です。ニューヨーク州ブルックリンのクラーク（Byron W. Clarke）夫妻が、23歳で亡くなった息子のメモリアル・ホールとして同志社に一万ドルを寄付してくれた資金で建てられたものです。ペスタロッチャー、留岡幸助、新島襄、クラークはイエスの説いた人間の生き方を忠実に受け継いだ教育者です。彼らは孤児であれ、非行少年であれ、クラスで一番出来の悪い生徒であれ、少年らの可能性を信じ、彼らを我が子のように愛しました。これらの教育者は「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」（申命記8章3節）ことを態度で示しました。「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書19章19節）という聖句があります。我々は日本という共同体、地球という共同体の住民です。共同体に住む人を隣り人として受けとめ、お互いに助け合うことを同志社の学風は教えています。今回の未曾有の大震災を思うにつけ、同志社に学び、同志社の学風を誇りに思います。同志社に学ぶ皆さんが、他大学とは異なる同志社の独自性、同志社らしさをこの四年間に身につけて、それを自分の生き方に取り入れていただければ幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

2011年5月31日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録